

厚生労働科学研究費補助金（神経変性疾患領域における基盤的調査研究事業）
神経変性疾患領域における基盤的調査研究事業 分担研究報告書

脊髄髄膜瘤のレセプトデータからみた移行期医療の問題

埜中 正博 関西医科大学 脳神経外科 診療教授

研究要旨 脊髄髄膜瘤のレセプトデータからみた移行期医療の問題

研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名

（分担研究報告書の場合は、省略）

A. 研究目的 脊髄髄膜瘤は原因が不明であり、かつ日本における疫学的な研究が不十分で実態が明らかではない。当研究では日本における脊髄髄膜瘤患者の実態調査のため、レセプトデータを取得し治療を受けている患者総数、治療内容、小児から成人に移行する際の医療機関受診状況を確認した。特に脊髄髄膜瘤患者は複数回の手術を必要とすることが多いが、これらの患者が生涯にわたってどのような治療を受けているかを明らかにした研究はないため、手術の種類と数に注目した。

B. 研究方法

株式会社日本医療データセンターから提供された2005年1月から2020年3月までの脊髄髄膜瘤患者556名の日本のレセプトデータを調べ、各専門分野で行われた手術の回数と手術時の年齢を調査した。患者さんを18歳以下（A群）と19歳以上（B群）の2つのグループに分け、この2つのグループ間で手術の種類や手術の割合がどのように変化するかを調べた。

（倫理面への配慮）

当研究は関西医科大学倫理審査委員会にて承認された

C. 研究結果 平均経過観察期間は4.4年であった。経過観察終了時の平均年齢は18.6歳（0～70.5歳）で、この期間に294人の患者に1,033件の手術が行われた（患者1人当たりの手術件数は0.42件/年）。A群の患者の手術件数は192人で818件、0.62件/年であり、B群の患者の手術件数は102人で215件、0.19件/年であった。B群では、皮膚手術、腎臓、尿管切開、膀胱切開、透析アクセス、帝王切開の割合が有意に高かった。

D. 考察

脊髄髄膜瘤の患者は小児期にとどまらず、生涯に渡り多くの手術を受けており、その手術は複数の科により実施されていることが明らかとなった。

E. 結論 成人になっても、脊髄髄膜瘤に関連した複数の専門分野の手術が相当数行われており、これらの患者は生涯を通じて継続的でかつ複数の科によるケアが必要であることを示していると考えられた。

G. 研究発表

1. 論文発表
別紙

H. 知的財産権の出願・登録状況
なし